

Book Review

月刊「歯科技工」別冊 インプラント技工のメインストリーム Clinical & Technical Standards Today

関根秀志・萩原芳幸・陸 誠 編

● ● ●

Reviewer

赤川安正 Yasumasa Akagawa
(広島大学名誉教授)

A4判, 156頁
カラー
定価 6,490円
医歯薬出版刊



デジタルトランスフォーメーション(DX)により、わが国は大きな変革期を迎えている。モノづくりの分野では、デジタル技術の活用により、生産性が向上し、精度が上がり、より安全になり、環境負荷が低減している。歯科技工のデジタル化は、このモノづくりのDXの流れの中に位置づけられる。

クラウン・ブリッジやインプラント上部構造の技工は大きく変わり、アナログ技工で製作するワックスパターン形成から金属鑄造や陶材焼付などは、デジタル技工でのCAD/CAMに替わられつつある。メタルフリーのニーズはこの変革をさらに加速させている。インプラント治療のデジタル化はめざましく、口腔内スキャナーによる光学印象採得に始まり、作業用模型のスキャン、コンピュータ上や模型上のセットアップモデルの設定とスキャン、CTを用いる画像診断、インプラント体埋入のコンピュータシミュレーション、シミュレーションに基づいたCAD/CAMによるサージカルガイドプレート製作、インプラント体の光学印象採得や光学咬合採得、CAD/CAMによる暫間・最終上部構造の製作にまで及ぶ。

このような時代にあって、月刊「歯

科技工」の別冊『インプラント技工のメインストリーム』が上梓されたことは誠に時宜を得ている。

本書はまず、タイトルの「メインストリーム」で手にとる者の目を引き、書かれた内容で読む者を理解・納得させる。それほどに、現在のインプラント技工の技術がデジタルを中心にアナログも含めてよく書かれていて読みやすい。さらに、IntroductionとPart1～Part3の4部構成とタイムリーなColumnは、編集者の優れた意図を感じさせる。

読者は、その意図通りに、Introductionで現在のデジタル化の潮流をつかみ、続くPart1で、デジタル技工の基本を臨床との関わりの中かで学ぶ。Part2では、デジタルワークフローのトピックスを理解し、Part3の臨床編で臨床との関わりを学習する。こうして読み進むうちに、読者はインプラントのデジタル技工の全容を把握することができ、さらに、デジタル技術の問題点や限界をも理解する。

こうした意図は歯科技工士だけでなく、歯科医師にも向けられているように思う。インプラント治療やインプラント技工の学びが浅い歯科医師や歯科

技工士は、まずはIntroductionとPart1を読んでほしい。デジタル技工にやりがいをもっている、あるいはデジタル技工の壁にぶつかっている歯科技工士は、基本の技工操作をPart1で改めて復習・確認するとともに、自分の興味のあるPart3の章を読むのがよい。予知性の高いインプラント治療のためには、歯科技工士はもちろんのこと、歯科医師も最新のデジタル技工の学びは欠かせない。

40年前、世界中のほとんどの人たちがまだ知らなかったオッセオインテグレートッドインプラントを、東京歯科大学の小宮山彌太郎先生と一緒にイエテポリ大学で1年間学んだ時のことを思い出す。「フィクスチャー(インプラント体)がオッセオインテグレーションを長期に維持し、口腔内で機能している」——このことこそが開発者のブローネマルク教授のコンセプトであり、そのためのインプラント技工のデジタル化であることは疑いない。それゆえ、インプラント技工のデジタル技術の理解と実践は、アナログ技術を習得した上に成り立つことを忘れてはならない。

本書を「歯界展望」の読者に勧める理由は、まさにこの点にある。